

コロナ禍の展示会 - 「校友山脈
明治大学の教育と人材」付・「ご存じ！明大時代小説家の系譜」と佐々木味津三-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学図書館 公開日: 2022-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村松, 玄太 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22431

コロナ禍の展示会―「校友山脈 明治大学の教育と人材」 付・「ご存じ！明大時代小説家の系譜」と佐々木味津三

村松 玄太*

はじめに―コロナ禍における展示とは

今回筆者が担当した展示「校友山脈 明治大学の教育と人材」（明治大学創立140周年記念事業 2021年度明治大学博物館特別展 会場 明治大学博物館特別展示室 会期 2021年7月31日～11月3日）を紹介するに際して、2020年に世界を襲った新型コロナウイルス感染症の諸影響を念頭に置かざるを得ない。

コロナ禍の「自粛生活」が開始されてからすでに2年目に入った。他の多くの事業者と同様、大学では授業や学生課外活動をはじめ、対面接触の機会を減らしながら感染リスク軽減につとめてきた。それは博物館・美術館などのミュージアムにとっても同様である。現在筆者の勤務する明治大学博物館（以下「博物館」と略記）の場合、2020年3月2日から展示公開を臨時休止とした。同年10月11日に明治大学学生及び教職員向けの公開再開、そしてようやく11月11日に一般向けの公開再開となったが、実に8ヶ月以上も、博物館事業の根幹たる対面での展示室再開がかなわなかつ

*むらまつ・げんた／明治大学 学術・社会連携部 博物館事務室（大学史資料センター担当）

た。現在(2021年10月末)も従来開館していた日曜及び祝日が休館、そして土曜日も開館時間短縮が続いており、展示機能が完全に回復をみてはいない状況である。

だがその間、ミュージアム総体としてこの事態を座視していたわけではない。2020年から、各ミュージアムの魅力ある資源をウェブやSNSを用いて発信することを目的とした「おうちミュージアム」が組織的な展開をみせている。発起者の北海道博物館の呼びかけに応じて現在約230のミュージアムが企画に賛同し、われわれの博物館もコンテンツを提供する。各ミュージアムが工夫を凝らしたコンテンツからは、「コロナ禍の一時しのぎ」ではない並々ならぬ意気込みを感じ、筆者も今後の新しい展示のありかたをめぐって大いに刺激を受けた(参加館は <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/ouchi-museum-list/> で確認できる)。

以下本稿では、コロナ禍が収束しない状況下で実施した展示であることを踏まえながら、上述の「おうちミュージアム」など新しい試みから示唆を受けたことも含め、①コロナ禍により変更せざるを得なかった点(ネガティブな点)、②コロナ禍ゆえに企画できたこと(ポジティブな点)、③展示で得た気づきについて留意しながら、展示準備、実施の流れについて紹介したい。

なお、本展示の概要については博物館広報誌「ミュージアム・アイズ」Vol.77(2021年9月28日 <https://www.meiji.ac.jp/museum/6t5h7p00000lwns6-att/museumeyes77.pdf>)において紹介を行っている。併せてご高覧いただければ幸いである。

1 当初の展示案

本展示の準備はコロナ禍の収束が見えない状況の2020(令和2)年度から開始した。博物館の展示公開を休止しているさなかであり、率直にいった展示会を開催できるのかどうか不安もあったが、館内の感染症対策に万全を期した上で、ともあれ準備を進めていった。

最初は以下のような企画を立てた。

(1) 主題

開催時期が2021年の明治大学創立140周年にあたっていたため、当初からテーマを「校友」にしようと考えていた。明治大学関係者には既知の事柄だが、明治大学では卒業生や、要件をみたした教職員等のことを「校友」と呼ぶ。校友名称は明治大学が最初に使用したともいわれる。創立期から校友は明治大学の運営を支援し、後進のサポートにつとめてきた。校友の数は58万名(2021年現在)に達する。周年を寿ぐにあたって、明治大学のステークホルダーのなかでもっとも規模が大きく、大学のこれまでの営みを体現する存在である校友を主題とし、大学がいまあることを共に喜び、今後も大学が持続的発展を遂げることを共に願いたいと考えたのである。

(2) タイトル

「校友山脈―明治大学の教育と人材」とした。「校友山脈」とは、創立以来連綿と輩出し続けた校友総体を共時的な存在として仮構した表現で、2015年頃からコラムなどで使用していた。「校友山脈」と冠した展示をぜひ実施したいとかねて思料していた。

(3) 展示構成

明治大学に学んだ各界の第一線で活躍する輩出人材の紹介と、その裏付けとしての大学の教育を紹介することとした。具体的な展示構成は次のようなものとした。

- I 明治大学の人材教育(学部教育の紹介)
- II 校友山脈―明治大学に学んだ人びと(①司法 ②政界・財界 ③文化・芸術 ④スポーツの4分野から105名を選定)
- III 校友ゆかりの品々(著名校友の資料展示)
- IV ご存じ！明大時代小説家の系譜(明治大学卒の時代小説家の資料紹介)
- V スポーツ関係資料紹介(明治大学校友スポーツ関係者の資料を紹介)

(4) 会期

周年事業として、なるべく多くの方に訴求する内容にしたいと考えた。とりわけ校友と明治大学を志願する受験生にはぜひ展示をご覧いただきたい。そのため、8月のオープンキャンパス、10月のホームカミングデーに重なる時期をコアとする、およそ3ヶ月にわたる展示期間を設定した。これは通常の展示会（1・2ヶ月程度）より長い会期である。

(5) 会場

メイン会場の博物館特別展示室に加え、より多くのお客様の目に触れていただくことを狙いとして、明治大学中央図書館ギャラリーおよび明治大学岸本辰雄ホール内ケースも展示スペースとして利用することを当初企図した。

2 当初企画から変更した点

次に、当初企画をどのように変更したか列挙する。

(1) 会場の縮小

2021年東京都で発出された緊急事態宣言期間は、1月8日から3月21日、4月25日から6月20日、7月12日から9月30日までである。ほぼ8ヶ月にわたって緊急事態宣言期間であったことに改めて事態の深刻さを覚えざるを得ない。

博物館はその間休館日を除いて開館はしていたものの、同じ学内施設でも、入構可能な対象が原則学生と教職員に限られる建物に所在する会場もあり、来館者に混乱が生じそうに思われた。そのため、残念ながら展示開始1ヶ月前に、2会場の使用を取りやめ、博物館特別展示室のみで展示を開催することを決めた。直前の変更で関係各所にご迷惑をかけることになった。

(2) 展示構成の変更

幸い展示の中止にまでは至らなかったものの、3会場で展開するはずであった展示を1会場に集約したため、展示品の間引きを図る必要があった。前節(3)に示したⅢ・Ⅳ・Ⅴにおいて、展示資料数をそれぞれ3分の1程度に減らすことになった。ただ、予期しない効果もあった。展示が集約されることによって、来館者が一度に資料を観覧できるようになったこと、そして、展示内容が端的に引き締まった感じになった。そのことも、副次的効果として一言しておく。

(3) オープンキャンパス・ホームカミングデーの対面開催中止

本展示の観覧をもっとも期待した明治大学志願者と校友とが多数来校する可能性のあったオープンキャンパスとホームカミングデーの対面開催が中止となった。コロナ禍でやむを得ない次第であったが、両イベントの開催時期に展示会期を合わせただけに、非常に心残りとなった。

3 コロナ禍における新たな試み

(1) インタビュー映像「校友山脈 明治大学140→150周年150人の卒業生たち」(守屋健太郎監督)の制作

いま述べたように、期待していた層に観覧いただけない場合もある。またそもそも緊急事態宣言下で、気軽な外出にブレーキがかかっているなかで、観覧機会を逸する方も多いただろうことは、予想がついた。そのため、対策として企画を立てることとした。「おうちミュージアム」の数多い試みなども参考にしながら、今回の展示では映像コンテンツを制作することとした。

映像は展示室を撮影して公開するといったものではなく、展示趣旨の「校友山脈」のコンセプトを映像として打ち出すものとした。具体的には、明治大学校友と、その育成の舞台である明治大学の教育について、校友自身に語っていただき、それを公開することとした。監督は守屋健太郎氏であ

る。同氏も明治大学校友（1992年法学部卒）であり、2020年に明治大学校歌制定100年記念映像「明治大学校歌の原型を聴く」の監督をいただいたご縁があった。守屋監督に映像制作の趣旨にご賛同いただき、アドバイスを得ながら社会各分野の第一線で活躍する以下の校友10氏インタビューをディレクションいただいた（敬称略）。

北野 大（1965年工学部卒 明治大学校友会会長 秋草学園短期大学長）

池端 俊策（1970年政治経済学部卒 脚本家）

立川 志の輔（1976年経営学部卒 落語家）

三田 紀房（1981年政治経済学部卒 漫画家）

野村 達矢（1986年商学部卒 ヒップランドミュージックコーポレーション社長・日本音楽制作者連盟理事長）

片倉 正美（1991年経営学部卒 EY 新日本有限責任監査法人理事長）

加藤 正俊（1992年政治経済学部卒 テレビドラマプロデューサー）

高橋 知典（2011年法学部卒 弁護士）

三澤 世奈（2012年商学部卒 江戸切子職人）

兎玉 雨子（2016年文学部卒・2018年大学院文学研究科修了 作詞家）

※映像は<https://www.youtube.com/playlist?list=PL8bCC-xrDXMSeM4zdA3wn4MOEwE7iLWVU>で視聴可能。

守屋監督から熱のこもったかずかずのご提案もいただき、このインタビュー映像企画は今後も継続させ、創立150周年を目指して150人規模の校友インタビューアーカイブズにしようと目標を定め、その検討を進めているところである。

（2）SNS活用の充実

これは筆者が主体的に進めていたものではないが、部署として充実を図り、展示にも貢献を果たしたものの一つである。博物館ではFacebook、Instagram、Twitterの公式アカウントを有している。コロナ禍を期にこれらのSNSをいっそう活用しようと、投稿の頻度と内容を充実させている。投稿にあたる広報各チームが事務室内に組織され、「校友山脈」展示にかかわる投稿記事をまとめるグループが、展示の見どころなど期間中多数の投稿を行い、展示の盛り上げに大きな役割を果たした。

校友山脈関連では、校友たちが過ごした昔日のキャンパス周辺の古写真を使用した SNS 投稿に、反響が大きいことなどがわかってきた。判明した情報に基づいてキャンパス周辺の古写真を利用した展示を柱とする企画「神田学生街 140 年の今↔昔」の開催に至ったことも、SNS 活用から生まれた成果の一つといえる。

（3）学生アンバサダーとの協業

2021 年 4 月から学生から博物館の魅力を発信してもらうことをねらいとして、博物館に「学生広報アンバサダー」の受入を開始した。今回は十分な形とはいえなかったが、学生の意見を容れて若干展示構成などに反映したり、展示会の宣伝活動などにあたっていただいたことも新しい成果であった。

付・「ご存じ！明大時代小説家の系譜」と佐々木味津三

本展示の一コーナーであった表題展示（本来この展示は、明治大学中央図書館ギャラリーで開催予定であった）と、そこで紹介した校友作家・佐々木味津三（1896-1937）に関して一言する。

明治大学は、いわゆる時代小説・歴史小説の書き手を数多く輩出している。子母澤寛（「新選組始末記」「座頭市」など）、佐々木味津三（「旗本退屈男」「右門捕物帖」など）、富田常雄（「姿三四郎」「武蔵坊弁慶」など）、五味康祐（「喪神」「柳生武芸帳」など）である。いずれも日本のポップカルチャーを先導した作家であり、多くの作品が映像化、舞台化されている。しかしこれだけ影響力の大きい作家たちの業績を検証する試みが現在まで十分になされていない。その状況を一つの憾みとし、今後の研究進展への足がかりとして今回の展示に組み込むこととした。

なかでも筆者が着目するのは佐々木味津三である。理由は 3 点ある。第 1 に、佐々木の作品や行動の解明をとおして、近代日本のポップカルチャーの系譜総体を解明する端緒になり得る、という点である。佐々木はもともと純文学の出身であり、ポップカルチャーとしての大衆文学の世界に進出することに、多分に自覚的であった。佐々木は夭逝したため、十分な展開

をみるには至らなかったものの、「大衆文学は無軌道の花電車」(1929年)などの論考で大衆文学をめぐる理論的先導者としての活動を示しつつあった。佐々木の文学的営為から、現在多様な姿をみせているポップカルチャーの端緒を見出す事も可能でないかと思っている。

第2に、大正期における日本文壇の実態の一端を明らかにする意義である。佐々木は学生時代、馬場孤蝶、小川未明、堺利彦、尾崎士郎たちと交流を深め、卒業後は菊池寛の知遇を得て「文藝春秋」創刊同人として、芥川龍之介をはじめとする作家と親しく接し、川端康成や横光利一たち新感覚派の作家とともに、「文藝時代」の創刊同人にもなる。大正期の日本文壇の系譜解明にも資することが期待される。

そして第3に、大学史上の意義である。大正期明大生の闊達な課外活動の一端を明らかにし得る。佐々木は大正期の学生課外活動が盛んになった時期の学生の典型といえ、文芸部に所属して雑誌の創刊にあたり、各種講演会の主催等で在学中から大きな話題を呼んでいた。不首尾に終わったが、現在の明治大学校歌制定に先立つ校歌募集にあたって、学生側委員として関与している。佐々木の学生時代の行動の解明を通して、大正時代の学生活動の一端が詳らかとなる可能性がある。

明治大学図書館では2020年、佐々木の文学活動の出発点である同人誌「四元」を収書した。同誌はもとより博物館(大学史資料センター)で所蔵する佐々木のご遺族から寄贈を受けた資料の分析を進め、上記の課題解明を図りたいと思っている。

むすびにかえて—得られた気づきと今後に向けて

述べ来たったとおり、コロナ禍によって活動が制限されるなかで、展示を当初想定どおりに展開できない面もあった。これは担当者として残念な思いもある。他方で、コロナ収束後も有効と思料される萌芽的な手法をいくつも見出すことができたのは幸いであった。とくにSNSやウェブツールの有効性が改めて確認できた。

しかし対面により実際に現物を目にしたり、触れたりすることも代えがたく重要であり続けている。

コロナ禍の展示会―「校友山脈 明治大学の教育と人材」付・「ご存じ！明大時代小説家の系譜」と佐々木味津三

コロナ禍の収束後、従来の手法と新しい手法とをミックスさせつつ、展示活動の一層の発展を期したい。